ジム・クロウの延長線

――『死の床に横たわりて』における精神病院と隔離政策

島　貫　香代子

Ⅰ　はじめに

ウィリアム・フォークナーの『死の床に横たわりて』（1930）は風変わりな物語である。内容自体はきわめて単純だ。本作品の主要な登場人物は、フォークナー作品でしばしば舞台となるミシシッピ州ヨクナパトーファ郡ジェファソンの南東に位置するフレンチマンズ・ベンドという村に住む白人貧困層（プア・ホワイト[1]）のバンドレン家である。一家の母親アディが死後はジェファソンにある彼女の実家の墓地に埋葬してほしいと夫アンスに頼んでいたため、彼女の死後、アンスとバンドレン家の5人の子どもたち（長男キャッシュ、次男ダール、三男ジュエル、長女デューイ・デル、四男ヴァーダマン）は彼女の遺言の内容を実現すべく、彼女の遺体を馬車で40マイル先のジェファソンまで運んでいくことになる[2]。本作品の大部分はフレンチマンズ・ベンドからジェファソンへ向かうバンドレン家の希望と苦難の旅路が占めるのだが、このオデッセイがバンドレン家を含む15名の語り手による59の主観的で断片的なエピソードを通して語られるため、実際に何が起こっているのかがわかりづらい。「意識の流れ」や「内的独白」といったモダニズムの手法で語られるそれぞれのエピソードが、物語の解釈を複雑にしている。

59のエピソードのうち、最も多く語るのがバンドレン家の次男ダールである。彼は本作品の約3分の1にあたる19のエピソードを担当し、しかもそれらは母親の死や洪水氾濫時の川の横断など、物語の重要な場面を取り上げている。キャッシュが“[i]t was just like he knowed, like he could see through the walls and into the next ten minutes”（236）と感じているとおり、ダールはその場に立ち会っていないにもかかわらず、あたかもそこにいるかのように語るときがあり、彼の千里眼的な視点についてはさまざまな角度から論じられてきた。ダールが信頼できない語り手であるものの、“his point of view is beyond contest the richest and the most flexible, his gaze the sharpest, his language the most spellbinding”（Bleikasten 188）は多くの批評家の一致した意見であろう。こうした批評家

1）　プア・ホワイトの呼び方に関する歴史的経緯については島貫117を参照のこと。
2）　本作品ではフレンチマンズ・ベンドとジェファソンの距離は40マイルだが（22, 92）、『村』（1940）では20マイルとなっている（3, 112）。一般的にフォークナー研究では後者を基準とすることが多い。なお、本稿において、著者や原典への言及がなく頁数のみの引用は『死の床に横たわりて』からのものである。

の評価とは裏腹に、人の心の奥を見透かすように凝視する目つきや脈絡もなく突然笑いだす様子が周囲の人々から奇異に思われていたダールは、腐敗が止まらない母親の遺体を道中で火葬しようとして彼女の棺桶を安置していたジレスピーの納屋を放火したために狂人と烙印を押され、最終的にミシシッピ州ジャクソンの精神病院へと送り込まれてしまう。精神病院に収容されたダールは笑う理由を自問し、“Yes yes yes yes yes yes yes yes”（254）とあたかも気が触れたかのように繰り返す。

ダールの狂気については多くの解釈が試みられてきたが[3)]、本稿ではダールが最終的に送られた場所が精神病院であるという点に注目し、1930年当時のアメリカ南部で支配的だった人種差別・隔離政策としてのジム・クロウとの関連でダールの顛末について考えてみたい。南部の片田舎のプア・ホワイトを中心とした本作品を理解するうえで、差別と隔離は大きなテーマであると思われるからだ。本稿では、ダール以外のバンドレン家の「黒さ」を検討したうえで、それがダールの精神病院行きと表裏一体の関係にあることを考察する。ダールの顛末は当時のジム・クロウの延長線にあるといっても過言ではないのである。

Ⅱ　バンドレン家の黒さ

本作品には出版当時のアメリカ南部における多様な白人社会が描かれている。プア・ホワイトの多く住むフレンチマンズ・ベンドと上流・中流階級の白人が社会の中心となっているジェファソンという田舎と都会（都市ではなく町といったレベルだが）の対比、プア・ホワイトからの脱出を願うかのようにジェファソンにある実家の墓地に埋葬されることを望むアディの上昇志向などの描写を通して、フォークナーは白人社会の複雑さを描き出す。ここで興味深いのは、フレンチマンズ・ベンドの黒人が登場しないことだ。本作品で登場する黒人は、バンドレン家がジェファソンに到着する間際の道中で出会う通りすがりの3名の黒人のみなのである。その一方、ジェファソンの黒人は白人に仕える召使いをはじめとしてフォークナーの他の作品に頻繁に登場し、物語で一定の役割を果たしている。たとえば本作品の1年前に出版された『響きと怒り』（1929）は、「意識の流れ」や「内的独白」といった実験的な一人称の語りを用いてある特定の白人家族を描いたという点で本作品としばしば比較されるが、この作品には三人称の語りになっているとはいえ黒人召使いディルシーの視点から描かれたセクションが存在する。ジェファソンの黒人の存在とフレンチマンズ・ベンドの黒人の不在は、両地域の白人の経済力や社会的地位の違い

3）ダールの精神状態については、彼の狂気について幅広く論じるアンドレ・ブレイカスタンやウィリアム・H・ルカート、階級やイデオロギーから論じるケヴィン・レイリー、セクシュアリティや男性性の観点から論じるロバート・W・ハムリンとキャンダス・ウェイド、家族と国家の関係性から論じるパトリック・オドネル、そして1927年のミシシッピ川大洪水をダールの狂気に関連づけて論じるスーザン・スコット・パリッシュなどを参照（Bleikasten 184-200; Rueckert 55-56; Railey 93; Hamblin 164-66; Waid 59; O'Donnell; Parrish 83-87）。

を示すと同時に、フレンチマンズ・ベンドの閉鎖的な地域性と人々の画一性を明らかにし、白人社会のさまざまな側面を映しだす。

しかし、本作品で黒さ（ブラックネス）が描かれていないわけではない。実在の黒人の存在が薄いことはたしかだが、幼さが残る語り手のヴァーダマンはバンドレン家の人々が「黒い」ことを無邪気に指摘し、一家の白人としての立ち位置を曖昧なものにしている[4)]。実際、バンドレン家は周囲の白人だけでなく、前述した通りすがりの黒人からも奇異な目で見られている。アディの遺体の存在を知らない黒人はバンドレン家の一行から放たれる強烈な異臭に唖然とし、“shock and instinctive outrage”（229）を示すのだ。本章では、一般的にプア・ホワイトがジム・クロウ社会において黒人と類似した立ち位置にあることを確認したうえで、バンドレン家の黒さについて考察する。

経済的な貧困や生活水準の低さが際立つ田舎者のイメージを伴うプア・ホワイトが、フォークナー作品で大きく取り上げられるのは、長編5作目の本作品が最初である。南北戦争以降、社会的階層の低い黒人とプア・ホワイトの協調を防ぐため、白人エリート層がプア・ホワイトの白人としての自尊心をくすぐってジム・クロウ支持を促した結果、白人社会におけるプア・ホワイトの存在感が増し、本作品の出版時にはもはや無視できない存在となっていた。フォークナーが『響きと怒り』で没落傾向にある貴族階級のコンプソン家を描き、その直後の本作品で躍動する上昇志向のプア・ホワイトの物語を描いたことは決して偶然ではないだろう。作家は本作品に続く『サンクチュアリ』（1931）でも無法者のプア・ホワイトと白人エリート層を対比させるかたちで登場させており、彼が当時、こうした白人社会の格差に大きな関心を寄せていたことがわかる。私は以前に発表した『サンクチュアリ』に関する拙論で「プア・ホワイトが階級（黒人に近い）よりも人種（白人）のアイデンティティを重視する」（島貫 127）ことを指摘したが、本作品においてもその傾向が見られると言えるだろう[5)]。

そこで、バンドレン家の黒さをテクストから見ていきたい。まずバンドレン家の父親アンスだが、本作品には、キャッシュと隣人のヴァーノン・タルがアディの棺桶を作るかた

4) ヴァーダマンの年齢は定かではないが、17歳のデューイ・デルの後に誕生したため、それ以下の年齢であることはたしかである。本作品ではコーラ・タルやモーズリーは彼を “that little one” “a little boy”（23, 203）と呼んでおり、彼の身長ほどもある大きな魚を抱きかかえている場面や、状況をうまく理解・説明できない子どもらしい語り口からは、デューイ・デルとはかなり年齢が離れているように見える。せいぜい7、8歳くらいの年齢と考えるのが妥当であろう（Hamblin 168）。デューイ・デルの直後に誕生したならば、彼は10代半ばであり、彼の幼稚なふるまいや言語能力の低さを考えると『響きと怒り』のベンジー・コンプソンのように知的障害があるのかもしれない。なお、フォークナーは後年、ヴァーダマンを “the child”（*University* 110）と呼んでおり、低めの年齢であったと記憶していたようである。

5) 拙稿では無法者のプア・ホワイトについて考察を行ったが、白さ（ホワイトネス）を重視するのは他のプア・ホワイトも同様である。階級の観点で言えば、レイリーが、コンプソン家とベンボウ家に代表される旧南部のパターナリズムと中流階級への上昇志向をもつバンドレン家に代表される新南部のリベラリズムを対比させて論じている（88–90）。プア・ホワイトが別のプア・ホワイトを下に見ることで階級的な差異化を図ろうとするというジャスティン・メレットの指摘も重要である（119）。人種の観点で言えば、ジョージアン・ポッツは、本作品に見られる黒人文化の影響について論じている。ポッツによると、花嫁衣裳を着た死体を逆さにして棺桶に入れる行為、黒人牧師の二面性、黒人教会における魚の象徴性などの黒人文化に根差したふるまいや意味づけが本作品の描写に類似している。

わらでアンスが何も手伝わずに突っ立っている姿を、その場にいないダールがあたかも見ているかのように語る場面がある。ダールは父親の様子を “his face, slack-mouthed, the wet black rim of snuff plastered close along the base of his gums”（76）と説明する。この描写の黒さは噛みたばこの説明であり、アンスの身体的な黒さを述べているわけではないが、口先ばかりで何もしない彼の偽善的な態度が示唆されている場面である。いろいろな犠牲を払ってたどり着いたジェファソンですぐに新しい（そしておそらく白い）入れ歯と妻を手に入れて満足げなアンスの様子は彼の黒い噛みたばこと対比をなし、彼の内面的な腹黒さを物語る。ジェファソンに固執するアディもまた、棺桶の中で腐敗していく死体と化して黒さを増していると思われる。さらに本作品では一家の子どもたちの黒さについても示唆されている。ヴァーノンは、キャッシュの眉を “smooth and black as if he had painted it onto his head”（90）、ヴァーダマンの目を “round and black in the middle”（70）と説明しているし、ダールもデューイ・デルの髪を “the black sprawl”（50）と表現している。

一家の黒さに最も敏感なのはヴァーダマンである。彼は、怪我した部位をセメントで固めたキャッシュの足が次第に黒くなっていくことを認めると、“Your foot looks like a [n*****]’s foot, Cash”（224）と話しかけている。ヴァーダマンは母親の棺桶を救出すべく火事の中に飛び込んでやけどを負ったジュエルの背中の赤みが次第に黒くなっていく様子にも気がつき、“Your back looks like a [n*****]’s, Jewel”（224）と指摘する。やけどを負ったジュエルの背中の変化についてはダールも触れており（227）、ジュエルの黒さを強調する。さらにヴァーダマンは、自分とデューイ・デルの月明かりに照らされて白く見える足と影になって黒く見える足を指して “half in the white and half in the black”（215–16）と言う。その後、彼は二人の足の白さよりも黒さをより強調するかたちで “Look . . . my legs look black. Your legs look black, too”（216）と言い直す。フレンチマンズ・ベンドで黒人に出くわす機会が少ないことに鑑みると、子どもらしい彼の無邪気な指摘は、バンドレン家だけでなくフレンチマンズ・ベンドの人々が自身の黒さに敏感である様子や、日常的に自分たちのことを黒人のイメージで語る村人の姿を彼が見聞きする機会が多いことを示唆する。「ヴァーダマン」という名前が白人至上主義を擁護したミシシッピの政治家・知事のジェイムズ・K・ヴァーダマン（1861–1930）と同じことからも、本作品のヴァーダマンの発言にはジム・クロウ社会における人種差別的な含みを読み取ることができるだろう[6)]。

バンドレン家に初めて出会った人々も、一家の黒さに言及している。道中のモットソンで薬屋を営むモーズリーは、町で見かけたことのないデューイ・デルが不慣れな様子で

6）ウォリック・ワドリントンは、本作品の政治的・人種的側面がヴァーダマンという名前にあらわれていることを指摘する（Wadlington 91–98）。特に、“small farmers and blue-collar workers name children after him [James K. Vardaman]”（Wadlington 92）の指摘は、政治家・知事のヴァーダマンがプア・ホワイトから絶大な支持を得ていたことを物語る。

店に入ってくると、彼女の目が他に例を見ないくらい黒いことを感じながら、顧客としては“a cheap comb or a bottle of [n*****] toilet water”（199）を買うのがせいぜいの田舎者と見定める。ジェファソンの薬局に勤める若い店員のスキート・マクガワンもデューイ・デルを無知な田舎者と見なし、彼女の目の黒さに注目している（242）。こうしたエピソードは、町の人々にとって、デューイ・デルに代表されるバンドレン家ひいては田舎のプア・ホワイトが黒人と同じような境遇にあることを示している。シェリル・レスターは、一家のジェファソンへの旅路が世紀末から急増していた南部から北部、田舎から都市部への大規模な移動を連想させること、そして終着点の途中にあるモットソンに到着したころからバンドレン家の黒さが町の人々の語りを通して際立つようになることを指摘する（35, 47）。この時期は白人だけでなく黒人の移動も顕著だったことに鑑みると、一家の埋葬旅行がはからずも彼らの黒さ（黒人に近い立ち位置）を露呈することになったと言えよう[7]。こうした議論から、バンドレン家が身体的・社会的な黒さを持ち合わせたプア・ホワイトであることがわかる。

Ⅲ　ダールの逸脱と疎外

前章でバンドレン家の黒さを見てきたが、奇妙なことに、どの語り手もダールの黒さについては言及していない[8]。こうした他の家族とは一線を画したダールの立ち位置については、彼の物を見通す力や豊かな表現力、第一次世界大戦時のフランス出征、母親との希薄な関係性といった視点から論じられてきた[9]。一見すると「白い」ダールだが、彼は最終的に別のやり方で社会と家族から隔離されることになる。以前からキャッシュとヴァーダマン以外の家族に疎まれていたダールは、放火が原因で、家族の総意でミシシッピ州ジャクソンの精神病院に送られてしまうのだ。本章では、バンドレン家の人々がプア・ホワイトに特徴的な身体的・社会的な黒さによって差別されるのとは異なるかたちで、ダールが家族ひいてはコミュニティから疎外されていることを確認する。

近年、文学分野におけるディスアビリティ研究が盛んである。たとえばアリス・ホールは、フォークナー、トニ・モリソン、J・M・クッツェーの作品で描かれるディスアビィティ表象が美的表現の有効な対象となりうるのかを問う。ホールはイギリスのUPIAS（the Union of the Physically Impaired Against Segregation）の定義を用いて「ディス

7）ジュリア・ライダも、バンドレン家の黒さと生物学的・遺伝的に劣等であることが都市部の白人の視点を通して強調されていると指摘する（41）。ライダはキャッシュの足が黒くなり、動きが制限されている様子を、黒人が経済的な成功を可能にする地理的移動を制限されている様子に重ね合わせている（58）。

8）ヴァーダマンは“[t]he moonlight dappled on him too”（225）と語り、ダールの姿がリンゴの木陰と月光によって濃淡ができていると指摘する。発言の“too”はヴァーダマンとデューイ・デルの足が“half in the white and half in the black”（215-16）となったエピソードをふまえたものだと思われるが、この場面のダールについてははっきりとした色の描写が出てこないため、“dappled”が彼の黒さをあらわしているとは言い切れない。

9）Atkinson 189-90; Hagood 124-25; Lester 44; Waid 56-57を参照のこと。

アビィティ」を「インペアメント」と区別している。この定義によると「インペアメント」が “lacking part or all of a limb, having a defective limb, organism or mechanism of the body” といった身体的・医学的側面を強調するのに対し、「ディスアビリティ」は “the disadvantage or restriction of activity caused by a contemporary social organization which takes little or no account of people who have physical impairments and thus excludes them from the mainstream of social activities” を意味するとして、社会的に構築された障壁を強調する（Hall 12）。ホールは『兵士の報酬』（1926）、『響きと怒り』、『村』、『寓話』（1954）の身体的・精神的な障害を持つ登場人物について、第一次世界大戦後の社会危機や優生学の隆盛をふまえながら考察しており、本稿の『死の床に横たわりて』の議論にも有意義な視点を提供してくれる。

本作品でディスアビリティとの関連で最も語られるのは、物語の最後で精神病院に送られるダールである。ヴァーノンはダールの謎めいた眼差しについて次のように語る。

> I always say it aint never been what he done so much or said or anything so much as how he looks at you. It's like he had got into the inside of you, someway. Like somehow you was looking at yourself and your doings outen his eyes. (125)

デューイ・デルもダールが自分の妊娠に気づいていることに脅威を感じ、すべてを見透かすような彼の目つきを “his eyes gone further than the food and the lamp, full of the land dug out of his skull and the holes filled with distance beyond the land” (27) と警戒する。アンスもデューイ・デルと同様の “the land” の比喩を用いてダールの目つきを “his eyes full of the land” (36) と語るのだが、父親と妹がダールの視線の先にあるものを空想ではなく地に足の着いた世界であると考えているのは興味深い。見えない光景が見えているという不思議さはあるにせよ、ダールが多く語るのは実際の出来事だからである。このようにダールの視点はある意味で非常に現実的なのだが、ダールの目つきや突然笑い出す様子は一見すると不可解であり、バンドレン家やフレンチマンズ・ベンドの人々が彼を警戒するのも無理はない。

テイラー・ハグッドは、『響きと怒り』のベンジャミン（ベンジー）・コンプソンと『村』のアイザック（アイク）・スノープスの認知障害との比較を通して、『死の床に横たわりて』のダールが当時の “the logic of normality” (121) から逸脱した人物として排除されていることを指摘する。たしかにコーラのようにダールに “sense” (152) があると考える人物もおり、彼の精神障害の程度や有無については議論の余地が残る。コーラはフレンチマンズ・ベンドの人々がダールを “queer, lazy, pottering about the place no better than Anse” (24) と見なしており、彼女の夫も “one of the folks that says Darl is the queer one, the one that aint bright” (152) であると言う。しかしヴァーノンはダールがむしろ

賢すぎるのだと感じており、“he just thinks by himself too much”（71）と見抜いて一定の理解をダールに示している。タル夫妻が考えるとおり、たとえばダールの放火は腐敗した死体をなるべく早く処理しようとした合理的な判断の結果と言えなくもなく[10]、“an object in the superstructure of normal society”（Hagood 126）と化したダールの精神病院行きについてはさらなる検討が必要である。

社会的に構築されたディスアビリティを考えるにあたり、精神病院送りになるきっかけとなったダールの放火に関するアハメド・ホネイニの指摘は参考になる。ホネイニは、ダールの逮捕の背景にはバンドレン家が罰金を払いたくなかったという経済事情があったことを説明するために、放火に関するミシシッピ州法を引き合いに出している。

> Any person who willfully and maliciously sets fire to or burns . . . whether occupied, unoccupied or vacant, any . . . barn, stable, or outhouse that is parcel thereof, . . . shall be guilty of arson in the first degree. . . . Any person convicted under this section shall be subject to treble damages for any damage caused by such a person.（qtd. in Honeini 73）

テッド・アトキンソンも、ダールの放火とその後の逮捕を資本主義的な側面から “the ownership of private property”（185）の問題としてとらえている。つまり、バンドレン家がアディの死体を運ぶ行為の “insanity” ではなく、所有物の破損行為が “irrational” と見なされた結果、ダールは精神病院に送り込まれるのである（Atkinson 185, 186）。アトキンソンは社会秩序を乱しかねないダールを排除するために国家権力が介入することに注目し、“ownership of private property is a natural and even sacred right not to be challenged in the least”（187）と結論づける。こうした議論は、ダールの逸脱を周囲から指摘されたアンスが “they begun to threaten me out of him, trying to short-hand me with the law”（37）と語り、その対処法として国家権力を象徴する法に早い段階から言及していたことを考えると示唆的である。

アトキンソンの指摘でさらに興味深いのは、ジャクソンの精神病院が国家権力の象徴であるということだ。ルイ・アルチュセールの国家権力と国家のイデオロギー装置の議論を援用したパトリック・オドネルも、ダールの排除が “negotiation and legitimation of the family’s continuance within the bounds of state authority”（84）の結果であり、アディの埋葬とダールの排除の後にバンドレン家の人たちが中流階級の価値観に順応し、新しい妻あるいは母とともに生活を始めるにあたって払わなくてはならなかった犠牲であると指

10）ダールの放火については、母親アディの愛の欠落と南北戦争後の南部社会の停滞から論じた竹内理矢の考察が別の有意義な視点を提供してくれる。本稿の文脈では、南部が「不毛地帯」と見なされ、ディスアビリティに陥った状態にあると考えることもできるだろう。

摘する。こうした議論では、ダールの狂気の真正性は問題ではない。ブレイカスタンが“the boundary between sanity and insanity is but the arbitrary division mark of a social order”であり、“madness only exists as defined by and confined in collective discourse and collective perception”（192）と論じ、ウェイドが正気とナショナリズムがほぼ同義であると主張するように（59）、社会の枠組みからはみ出した者がさまざまなレッテルを貼られて特定の閉鎖的な施設に隔離されるという事態が生じているのである。

ダールは最後に精神病院へと送られるが、放火罪ならば刑務所でもよいはずだ。『サンクチュアリ』や『八月の光』（1932）のジェファソンの刑務所、『野性の棕櫚』（1939）のミシシッピ州立刑務所（別名パーチマン農場）からもわかるとおり、フォークナーはしばしば刑務所を舞台にしている。刑務所と精神病院の建物の構造が似ていることも指摘されているが（Mitchell 231）、それでもあえて精神病院なのは、ダールのジャクソン行きが彼の犯した罪（外的要因）ではなく、彼の精神状態（内的要因）――ディスアビリティ――を強調するためだと言えるだろう。他のバンドレン家の人々のような黒さを持ち合わせていないダールがたとえ白くてもコミュニティから排除される様子は、当時の白と黒の差異を起点としたジム・クロウの隔離社会の複雑さと曖昧さを物語る。

Ⅳ　ジャクソンの精神病院

ダールが精神病院へ送られることになった社会的背景や家族的な動機についてこれまで考察してきたが、従来のフォークナー研究では国家権力と結びついたジャクソンの精神病院が実際にどのような場所であったかについての説明はわずかで[11]、この施設の社会的な存在意義とダールの顛末の関連性については不問のままである。ルカートはアディとダールの顛末の類似性を指摘し、“they are only dead in different ways and Darl will go on dying for many more years”（51）と主張するが、「死を迎える場所」としての精神病院については当時の状況を確認することが必要であろう。ダールの顛末は、ジャクソンの精神病院が当時のジム・クロウ政策と無関係ではなかったことに鑑みると[12]、考察の余地が残っていると思われる。本章では、本作品と同様に精神病院への言及がある『響きと怒り』も例に挙げながら、当時のジム・クロウ社会で精神病院が果たした役割とその位置づけを確認する。

フォークナー作品でまず精神病院を想起させる登場人物と言えば、『響きと怒り』のコンプソン家の三男ベンジーであろう。33歳の大人であるにもかかわらず幼児レベルの知能しかもたないベンジーは、一家の長となった兄の次男ジェイソンに疎まれ、ダールと同様

11）ミシシッピ州立精神科病院については、本作品のノートン版が1925年7月1日から1927年6月30日までの病院の報告書を一部紹介している（Mitchell 228-32）。『響きと怒り』のベンジーの症状が自閉症である可能性を示した論文の中で、パトリック・サムウェイ・S・Jとジェントリー・シルバーもこの精神病院の歴史を概観している（17）。

12）ポストベラム期のジャクソンの精神病院とジム・クロウの関係性については、ホイットニー・E・バリンガーとマイケル・トマス・マーフィの博士論文に詳しい。

に精神病院行きを余儀なくされた人物である[13]。ジェイソンはベンジーのジャクソン行きをしばしば口にする。たとえばベンジーが少女を襲ったことが問題になった後、ジェイソンは“*I reckon you'll send him to Jackson, now. If Mr Burgess dont shoot him first*”（*Sound* 52）と父親に言い放つ。さらに別の場面でもジェイソンは、“I says if they'd sent him to Jackson at first we'd all be better off today”（*Sound* 222）と母親に語り、ベンジーの世話が大きな負担となっていることを口にする。母親と長女キャディはベンジーをかわいがっていたが、重い知的障害を患ったベンジーの世話が家族の負担になっていたことは容易に想像できるし、C・D・ミッチェルが“[s]o often insanity is considered a disgrace rather than an illness”（231）と述べるように、ジェファソンで古い歴史を持つコンプソン家としては家の名誉を守るためにもベンジーを厄介払いしたいところであろう。ベンジーの世話役である黒人召使いのラスターもコンプソン家の人々が口にする「ジャクソン」が精神病院を意味することを理解しており、“You know what they going to do with you when Miss Cahline［Mrs. Compson］die. They going to send you to Jackson, where you belong”（*Sound* 54）とベンジーに話しかけて彼を脅している（言語処理能力に欠けたベンジーには意味が通じないのだが）。

コンプソン家はジェファソンの名家だが、物語の現在では経済的に没落し、精神的にも退廃し、アメリカ南部の上流階級社会の崩壊を象徴するような存在となっており、ベンジーの知的障害はコンプソン家の衰退を示唆する要素の一つとして作品で提示されている。その一方で、バンドレン家はフレンチマンズ・ベンドのプア・ホワイトだが、南北戦争以後の新南部で存在感を示し始めたプア・ホワイトの上昇志向の気質を持ち合わせており[14]、中流階級にのし上がろうとする意欲を持たないダールは排除される。ダールにはベンジーのような言語や思考の知的障害は見られないし、彼の千里眼的なまなざしや深い洞察力は、むしろハーヴァード大学の1年目が終わったタイミングで自殺するコンプソン家の長男クエンティンの研ぎ澄まされた知性や鋭い感性を想起させる。ただし、ベンジーとダールは両作品で共通した役割を担っており、彼らの精神病院行きがジム・クロウ社会の階級構造の変化を示唆することは前述した。またジム・クロウの根拠の一つとなったのは19世紀末から普及した優生学に基づく白人優越主義や科学的人種主義であったが、均質的な中流階級社会に適さない人々は白人であろうが黒人であろうが優生学の名のもとに異質な存在として排除され、精神病院はそうした人々の受け皿となった[15]。精神病院はジム・

13）『響きと怒り』の続編ともいえる「付録――コンプソン一族」（1946）では、母親の死後、ベンジーはジェイソンによって1933年にジャクソンの精神病院に送り込まれている（344, 346）。「付録」と異なり、『館』（1959）では、ベンジーは母親の懇願で家に連れ戻されるが、2年もしないうちに屋敷を放火し、彼自身も火の中で焼死する（354）。いずれにせよ、ベンジーが一定期間を精神病院で過ごしたことはたしかである。

14）当時の社会階級の変動とバンドレン家の関係性については、Railey 88–96を参照のこと。

15）優生学の歴史と人種主義との関連性についてはWilson 25–49と貴堂「20世紀初頭」6–7を参照のこと。また、白人社会の内部でも精神薄弱者や東欧・南欧出身のいわゆる「新移民」に優生学が適用されたことも本稿の文脈で重要である（貴堂「移民国家」138–39）。

クロウに基づく隔離政策の一端を担っていたのである。

『死の床に横たわりて』では、物語の最後で突然ダールがジャクソンの精神病院に送り込まれるが、フォークナーは実際の精神病院に関する知識をある程度持ち合わせていたであろう。というのも、本作品でアディと一時的に不倫関係にあった牧師の名前とジャクソンから移転した精神病院の通称が同じ「ホイットフィールド」なのである。1855年に開設してから半世紀近く、ジャクソンの精神病院の正式名称はミシシッピ州立精神科病院（the Mississippi State Lunatic Asylum）であったが、1900年にミシシッピ州立精神科病院（the Mississippi State Insane Hospital）と改名され、1935年にジャクソン東部のランキン郡へ移転した後はミシシッピ州立病院（the Mississippi State Hospital）とさらに改名されて今に至る（Lampton）。移転後の精神病院の通称は敷地内にあった郵便局と駅の名前がホイットフィールドだったことに由来すると言われるが（Lampton）、現在はれっきとした地名であり、ランキン郡の非法人地域（地方自治体に属していない地域）となっている[16]。ミシシッピ州立刑務所が地名にちなんで「パーチマン」または「パーチマン農場」と呼ばれるのと同じ論理で、『響きと怒り』と『死の床に横たわりて』では精神病院に言及するときに地名の「ジャクソン」が使われており、こうした間接的な呼び方が精神病院や刑務所では当時から一般的であったことがわかる。

なお、ホイットフィールドというそもそもの呼び方は、現在の精神病院のあるランキン郡の出身で、1924年から1927に急逝するまでミシシッピ州知事であったヘンリー・L・ホイットフィールド（1868–1927）の名前に由来する（Murphy 1–2; Barringer 208）[17]。大恐慌や政治闘争で建設が遅れたためミシシッピ州立病院が開設するのは1935年だが、病院の移転が州議会で決まったのはホイットフィールドが州知事として在職していた1926年であり、当時のミシシッピ州立精神科病院をランキン農場（ランキン郡にある刑務所の通称）に建設する計画を推し進めたのは彼である（Lampton; Barringer 207）。本作品の出版当時はまだ精神病院が移転していなかったため、牧師の名前は地名ではなく知事に由来する。ただ、生前のホイットフィールドが狭くて不衛生な精神病院の劣悪な環境を改善するための移転計画を提案し、移転を求める病院の経緯報告書が作成されたことに鑑みると（Mitchell 231–32）、本作品のホイットフィールド牧師の名前には精神病院との関連性を見出すことができる。精神病院の改善を図った良心的な知事に対し、共通点として偽善的な側面が本作品で強調されているのは皮肉としか言いようがない。

16）マーフィはホイットフィールドという名前が連想させるイメージを次のように述べている。“Residents have used the name to denote a sense of locational and social marginalization. The hospital, like the state penitentiary, is located on the periphery of society and in an unrestricted area.”（2）この記述から、精神病院や刑務所が人里離れた場所に設置され、社会から隔絶されていることがわかる。

17）ワドリントンはホイットフィールド知事の教育面と宗教面における功績を紹介したうえで、本作品のホイットフィールドとアディの不倫関係を考察している（98–100）。ところが、ホイットフィールド知事とミシシッピ州立精神科病院の関係性については言及がない。この病院を概観した注11のミッチェル、サムウェイとシルバーも同様である。

マーフィは、ミシシッピ州立精神科病院がジム・クロウ社会を強固なものとするのに貢献したと述べたうえで、精神障害を抱える黒人とプア・ホワイトにとっては特に、この病院が “a controlling and stigmatizing institution”（6）であったと語る。厳格なジム・クロウに基づき、黒人がここで劣悪な環境に置かれただけではない（Mitchell 228–29）。ジム・クロウと同時期に支持された優生学の影響もあり、精神病院では人種を問わず「不適者」――精神薄弱者、精神異常者、犯罪者、てんかん患者など――に断種が行われたが、社会経済的・人種的・ジェンダー的背景と科学的推論によって黒人やプア・ホワイトはその対象になりやすかったのである（Murphy 195, 198, 201）。ミッチェルは当時の精神病院の患者を対象とした作業療法や社会奉仕活動を前向きに紹介しているが（230–31）、こうした人々の多くは社会から隔離されたという精神的苦痛だけでなく、断種や不自由な生活による身体的苦痛を伴いながら精神病院で過ごしていた。ベンジーはプア・ホワイトではないが明白な知的障害があり、かつ精神病院に送られる前に去勢されており、当時の風潮に沿った姿で描かれている。未婚のダールは “queer”（24, 125, 152, 168, 237）な様子が優生学的に問題視されたかもしれないが[18]、ジャクソン行きの最大の理由が納屋の放火である以上、社会秩序を乱す危険人物を封じ込めるという意味合いが強く、精神病院への隔離が単に厄介者や犯罪者を追い払うための常套手段となっていた可能性が高い。次章では放火後のダールの様子について詳しく見ていくことにする。

V　ダールの狂気と社会の正気

洪水や火事などのさまざまな困難を乗り越え、フレンチマンズ・ベンドを出発してから9日後にようやくバンドレン家はジェファソンに到着し、アディを埋葬する。その直後、ダールは捕らえられ、ジャクソンの精神病院に送られてしまう。道中でダールの気の触れた様子は見当たらず、到着間際もアンスが（当時最新のテクノロジーの）電話でアディの墓を事前に手配しておくべきだったことを冷静に指摘したり、ジュエルとジェファソンの白人のいざこざをうまく仲裁したりする（228–31）。ジェファソンに到着してからもダールはキャッシュの足の具合を心配し、なるべく早く医者に診せてあげようとする優しさを持ち合わせている（234–35）。ダールに対するジュエルとデューイ・デルの以前からの不信感や憎悪感情もあり、一家はジレスピーから放火で訴えられるのを恐れてダールを精神病院に入れることにするが、キャッシュだけはダールの言動における真意を推し量ろうとする。本章では、キャッシュとダールの語りを通してダールの狂気と社会の正気について考察し、ダールの状態に精神病院の存在が大きく関係していることを指摘する。

キャッシュはダールの逮捕が “[i]t wasn’t nothing else to do”（232）と考え、彼が今後

18）ダールがキャッシュの目つきを “queer”（133）と語る場面があり、両者には共通する特徴がある。これは物語の最後でキャッシュがダールに一定の理解を示すことにもつながる。

ずっといることになるであろう精神病院に入る前に母親の埋葬を終えることを他の家族に提案する。ダールの放火に一定の理解を示すキャッシュは次のように正気と狂気について語る。

> Sometimes I aint so sho who's got ere a right to say when a man is crazy and when he aint. Sometimes I think it aint none of us pure crazy and aint none of us pure sane until the balance of us talks him that-a-way. It's like it aint so much what a fellow does, but it's the way the majority of folks is looking at him when he does it. (233)

人間は正気を保つことも狂気に陥ることもできる存在だが、人間を裁くのは人間の集合体としての世間である。最終的にダールの放火をより重く受け止めたキャッシュは、"I reckon they aint nothing else to do with him but what the most folks say is right" (234) と民主的に結論づけて自分を納得させようとする。人間や物事の本質と真実を見抜こうとするダールとは違い、キャッシュは正しさや正義とは異なる別の論理――社会性と経済性――を尊重するのだ。ヴァーダマンの "*He went crazy and went to Jackson both. Lots of people didn't go crazy. Pa and Cash and Jewel and Dewey Dell and me didn't go crazy. We never did go crazy. We didn't go to Jackson either*" (251) という内的独白は、多数決の論理が社会を支配することを示している。

そもそもダールはアディの棺桶だけを燃やせばよかったので、納屋ごと火の海にするのがやりすぎであることは常識的に考えればそのとおりである。千里眼を持つダールならば放火による自らの逮捕を予測できたはずだが、放火の場面は描かれず、逮捕の場面はキャッシュの視点から描かれており、ダールの心中はわからない。ダールは逮捕時に驚くような様子を見せ、彼を捕まえに来た人々や押さえつけようとした家族に激しく抵抗するが、しばらくすると一人でげらげら笑いだす (237-38)。キャッシュは "Down there it'll be quiet, with none of the bothering and such" (238) とダールを説得し、ダールの幸せを考えてジャクソン行きを勧める。ただし、最後にキャッシュは "I aint so sho that ere a man has the right to say what is crazy and what aint" (238) と繰り返し、狂人扱いされたダールの逮捕に救済の余地があると考えている。しかし、こうした倫理的な主張は優生学に裏付けられたジム・クロウ社会において認められず、狂人と見なされたダールはジャクソンに行くこととなる。

奇妙なことに、ジャクソンへ向かうダールの語りは自らを突き放したような三人称の視点から語られており、一見すると彼が本当に気が触れてしまったかのようである。道中も彼は笑い続け、見えるはずのないバンドレン家のその後の様子を視覚化する。キャッシュがジャクソンの精神病院を楽園のようにダールに説明していたとおり、そこが "quiet"

(238) であることはダールも “the quiet interstices” (254) と語っているのでたしかであろう。しかし、ダールはそこが “a cage” に囲まれた世界であることを認識しているし、実際の精神病院が劣悪な環境であるのは “his grimed hands” というダールの不衛生な状態から推測できる (254)。そして最後の “he foams” と “Yes yes yes yes yes yes yes yes” (254) の描写からは、ジャクソンにいるダールの精神状態がもはや正常ではなくなったことが示唆されている。

ヴァーダマンは “*He didn't go on the train to go crazy. He went crazy in our wagon*” (251) と語るが、ダールの変化はジャクソンに向かう途中で顕著になり、精神病院で悪化したと思われる。家族に見捨てられ、社会的に「不適者」というレッテルを貼られた瞬間、ダールの中で守るべき何かが崩れ去ってしまったのであろう。正気と狂気の境界線はきわめて恣意的で、時代や場所によって揺れ動くことに鑑みると、アメリカ南部のジム・クロウ社会はキャッシュが語るとおり “[t]his world is not his world; this life his life” (261) で、ダールにとっては生きづらい世界となる。しかし、それ以上にジャクソンの精神病院での生活が彼にとって何の益にもならないことは、彼の精神状態の悪化から見てとれる。結局のところ、精神病院はジム・クロウ社会の延長線上にあるからだ。

Ⅵ　精神病院という隔離された世界

これまでの章において、バンドレン家の黒さとそれを持ち合わせていないように見えるダール、家族と社会の常識から逸脱するダール、ミシシッピ州ジャクソンの精神病院の社会的意義、精神病院とジム・クロウの関係性、ダールの狂気を決定づける社会の正気について考察してきた。バンドレン家が損害賠償の責任を逃れたかったこともあり、プア・ホワイトの精神障害者として、優生学が隆盛していた20世紀前半のジム・クロウ社会で二重に差別された結果、ダールはジャクソンの精神病院に隔離されてしまう。ダールの顛末は当時のアメリカ社会の分断が人種・民族の区分だけにとどまらないこと、つまりジム・クロウに基づく当時の社会秩序が白人・黒人を問わず、ディスアビリティ、ジェンダー、階級などに基づくさまざまなマイノリティの排除によって成り立っていたことを物語る。本作品のジャクソンの精神病院は、そうしたジム・クロウ社会の白人中流階級の秩序を維持するための装置として機能していたと言えるであろう。

現在の観点で言えば、優生学の科学的根拠は問い直され、社会運動の視座から再考されることも多くなり、精神病院のあり方も本作品の出版当時から大きく変化している。ミシシッピ州立病院のウェブサイトには、“Mississippi State Hospital does not discriminate against any person on the basis of race, color, national origin, disability or age in admission, treatment or participation in its programs, services and activities or in employment” (*Mississippi State Hospital*) と明記されている。法制度や倫理観は時代とと

もに変化するものであり、精神病院に収容された人たちに対する当時の無理解や差別は徐々に減り、彼らの置かれた立場や環境は改善されつつあるのであろう。しかし、現在のミシシッピ州立病院は1935年にホイットフィールドに移転してから場所を変えておらず、依然として外部から隔離されたところにある（パーチマンにあるミシシッピ州立刑務所も同様である）。あからさまなジム・クロウによる差別は影をひそめるようになったが、隔離政策は社会の片隅で今も続いている。ダールの顛末は人々の排他性や偏見が引き起こした悲劇と言えるが、同時にさまざまな背景をもった人々が共生することの難しさを物語る。

引用文献

Atkinson, Ted. *Faulkner and the Great Depression: Aesthetics, Ideology, Cultural Politics*. U of Georgia P, 2006.

Barringer, Whitney E. *The Corruption of Promise: The Insane Asylum in Mississippi, 1848–1910*. 2016. U of Mississippi, PhD dissertation.

Bleikasten, André. *The Ink of Melancholy: Faulkner's Novels from* The Sound and the Fury *to* Light in August. Indiana UP, 1990.

Faulkner, William. "Appendix: Compsons: 1699–1945." *The Sound and the Fury: The Corrected Text with Faulkner's Appendix*, Modern Library, 1992, pp. 329–48.

——. *As I Lay Dying*. Vintage International, 1990.

——. *Faulkner in the University*, edited by Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, UP of Virginia, 1995.

——. *The Hamlet*. Vintage International, 1991.

——. *The Mansion*. Vintage International, 2011.

——. *The Sound and the Fury*. Vintage International, 1990.

Hagood, Taylor. *Faulkner, Writer of Disability*. Louisiana State UP, 2014.

Hall, Alice. *Disability and Modern Fiction: Faulkner, Morrison, Coetzee and the Nobel Prize for Literature*. Palgrave Macmillan, 2012.

Hamblin, Robert W. *Critical Essays on William Faulkner*. UP of Mississippi, 2022.

Honeini, Ahmed. *William Faulkner and Mortality: A Fine Dead Sound*. Routledge, 2022.

Lampton, Lucius M. "Whitfield (Mississippi State Hospital)." *Mississippi Encyclopedia*, Center for Study of Southern Culture, 15 Apr. 2018, mississippiencyclopedia.org/entries/whitfield/. Accessed 30 Oct. 2023.

Lester, Cheryl. "As They Lay Dying: Rural Depopulation and Social Dislocation as a Structure of Feeling." *Faulkner Journal*, vol. 21, no. 1/2, 2005/2006, pp. 28-50.

Leyda, Julia. "Reading White Trash: Class, Race, and Mobility in Faulkner and Le Sueur." *Arizona Quarterly*, vol. 56, no. 2, 2000, pp. 37–64.

Mellette, Justin. *Peculiar Whiteness: Racial Anxiety and Poor Whites in Southern Literature, 1900–1965*. UP of Mississippi, 2021.

Mississippi State Hospital. www.msh.state.ms.us./. Accessed 15 Nov. 2023.

Mitchell, C.D. "Thirty-Sixth Biennial Report of the Mississippi State Insane Hospital, Jackson, Mississippi. From July 1, 1925 to June 30, 1927." As I Lay Dying*: Authoritative Text, Backgrounds and Contexts, Criticism*, edited by Michael Gorra, 2nd ed., Norton, 2022, pp. 228–32.

Murphy, Michael Thomas. *Inhospitable in the Hospitality State: The Mississippi State Hospital in the Jim Crow South, 1865–1966*. 2018. Mississippi State U, PhD dissertation.

O'Donnell, Patrick. "Between the Family and the State: Nomadism and Authority in *As I Lay Dying*." *Faulkner Journal*, vol. 7, no. 1/2, 1991/1992, pp. 83–94.

Parrish, Susan Scott. "*As I Lay Dying* and the Modern Aesthetics of Ecological Crisis." *The New Cambridge Companion to William Faulkner*, edited by John T. Matthews, Cambridge UP, 2015, pp. 74–91.

Potts, Georgiann. "Black Images in Faulkner's *As I Lay Dying*." *Studies in English, New Series*, vol. 7, 1989, pp. 1–26.

Railey, Kevin. *Natural Aristocracy: History, Ideology, and the Production of William Faulkner*. U of Alabama P, 1999.

Rueckert, William H. *Faulkner from Within: Destructive and Generative Being in the Novels of William Faulkner*. Parlor Press, 2004.

Samway, Patrick, S.J. and Gentry Silver. "In *The Sound and the Fury*, Benjy Compson Most Likely Suffers from Autism." *William Faulkner Journal of Japan on the Internet*, no. 12, 2010, pp. 1–27. www.faulknerjapan.com/journal/no12/pdf/EJNo12_Samway_Silver.pdf. Accessed 19 Nov. 2023.

Wadlington, Warwick. As I Lay Dying*: Stories out of Stories*. Twayne, 1992.

Waid, Candace. "Burying the Regional Mother: Faulkner's Road to Race through the Visual Arts." *Faulkner Journal*, vol. 23, no. 1, 2007, pp. 37–92.

Wilson, Robert A. *The Eugenic Mind Project*. MIT Press, 2018.

貴堂嘉之「移民国家アメリカの『国民』管理の技法と『生―権力』――人種主義と優生学」『権力と暴力』ミネルヴァ書房、2007年、133–54頁。

――「20世紀初頭のアメリカ合衆国における優生学運動と断種――世界初の断種法制定からサンガーの産児調節運動まで」『ジェンダー史学』第17号、2021年、5–19頁。

島貫香代子「"These People Are Not Your People"――『サンクチュアリ』における人種問題と階級問題」『商学論究』第70巻第4号、2023年、115–32頁。

竹内理矢「『死の床に横たわりて』におけるダールの放火――母への近親相姦願望と戦後南部の告発」『フォークナー』第8号、2006年、104–12頁。

Extension of Jim Crow:

Psychiatric Hospitals and Segregation Policies in *As I Lay Dying*

Kayoko SHIMANUKI

In William Faulkner's *As I Lay Dying* (1930), Darl Bundren stands out among those around him due to his peculiar behavior: his penetrating gaze that seems to delve into people's souls and sudden fits of laughter devoid of context. His attempt to cremate his decomposing mother's body and burning down Gillespie's barn, where her coffin was housed, leads his family to brand him as insane, resulting in his confinement to a psychiatric hospital in Jackson, Mississippi. This paper explores Darl's arrest and incarceration through an analysis of the role of psychiatric hospitals within the framework of Jim Crow society.

Initially, this paper highlights the comparable social standing of the Bundrens and other poor whites to that of Black people in Jim Crow society. Although Darl does not embody this "Blackness," he is perceived as disabled and estranged from both his family and society. Notably, Darl's arrest emphasizes the repercussions of the significant damage he caused to others' private property rather than solely focusing on his mental state. His exclusion from the community, despite not sharing the same Black characteristics as other Bundrens, underscores the intricate and ambiguous nature of Jim Crow's segregated society.

A central tenet of Jim Crow ideology was white supremacy and scientific racism rooted in eugenics, prevalent since the late 19th century. Individuals who did not conform to the standardized middle-class societal norms — regardless of their race — were marginalized under the guise of eugenics, often finding themselves confined within psychiatric hospitals. Darl, facing dual discrimination as a mentally disabled poor white, finds himself isolated in the Jackson psychiatric hospital, partly to absolve the Bundren family of liability for damages. Given that psychiatric hospitals were instrumental in perpetuating Jim Crow segregation, Darl's mental state likely deteriorated during his confinement.

Darl's incarceration illustrates that societal divisions extended beyond racial and ethnic lines. It underscores how the prevailing social hierarchy of that era was built

upon the exclusion of various marginalized groups, including those with disabilities, differing genders, and varying socioeconomic statuses — regardless of their racial background.